



石川県立美術館開設50周年記念

近代日本美術の精華

東京藝大美術館コレクションを中心に

■ [特集] 近代日本画とその周辺
前田育徳会尊經閣文庫分館

■ [特集] 古美術優品選 第2展示室

■ [特集] 南政善－生誕100年－ 第3展示室

■ [特集] 吉田三郎のあゆみ 第4展示室

- 平成20年度の新収蔵品
- 展覧会回顧「百万石の大名展」
- 講座開催にあたって
- 第7回美術館バスツアー募集
- 行事案内
- 所蔵品紹介

石川県立美術館開設50周年記念

近代日本美術の精華

東京藝大美術館コレクションを中心に
4月26日(日)～5月31日(日)会期中無休

1F
企画展示室

学芸員の眼

今回の展示作品の中で、もっともよく知られていると思われるのは、重要文化財に指定されている高橋由一作《鮭》でしょう。美術の教科書等でも時おり掲載されているので、一度は目にされたことがあるのではないのでしょうか。

この作品は、日本洋画の先駆者の一人・高橋由一の代表作といえるものです。紙の上に膠でドウサを引き、その上に油絵具で着色されています。写真ではあまり実感できないと思いますが、作品は縦百四十七センチ、横四十六・五センチというかなり大きなものです。つまり、ほぼ実物大の大きさで描かれているわけで、由一はおそらく、克明に鮭の質感を描き出すとともに、大きさも似せることによって、まさにそこに鮭が存在すると感じさせる効果を考えて制作したと思われるでしょう。西洋画のリアルな表現法に心惹かれた由一の熱意が、強く反映された作品といえましょう。

現在の東京藝術大学の前身である東京美術学校は、明治二十二年に開校し、以来わが国の美術界に多くのすぐれた人材を輩出してきました。本県からも東京美術学校に学ぶ学生が、とりわけ明治の後半から大正期にかけて多く見られます。中でも金沢工業学校（現在の石川県立工業高等学校）から進学するケースが目立つのですが、その要因のひとつは、美術学校の卒業生や教官が工業学校に赴任したこと（たとえば白井雨山、板谷波山、山脇晴雲、山田敬中など）、さらに工業学校を卒業し美術学校に進んだ先人たちが、後輩の後ろ盾となったこと（たとえば島田佳矣、青木外吉など）があげられます。記録によれば、昭和十二年現在で石川県出身の卒業生数は百七十七名で、東京に次いで多くの数を誇っています。そうした美術学校で研鑽を積んだ卒業生たちは、作家として、あるいは教育者として、郷里の美術振興に貢献してまいりました。

本展では、本県出身の美術学校の卒業生の作品に加えて、明治四十年からほぼ四年おきに、昭和十二年まで金沢で開催された東京美術学校郷友会展に出品された、近代日本の著名な芸術家たちの作品、さらにその周辺の大家の作品も交えて展示いたします。日本画では、狩野芳崖、橋本雅邦、横山大観、

下村観山、川端玉章など、西洋画では、高橋由一、浅井忠、黒田清輝、久米桂一郎、藤島武二などがあげられます。また彫刻では、建畠大夢、朝倉文夫、北村西望、工芸では、板谷波山、富本憲吉、北出塔次郎、高村豊周、蓮田修吾

郎、六角紫水、松田権六、寺井直次、佐治賢使、田口善国といった人々の作品を展示する予定です。約百点の展示ですが、そのうち九十点近くは、東京藝術大学美術館のコレクションであり、重要文化財三点を含みます。また奈良時代（八世紀）に制作されたとされる《国宝 絵因果経》も、本展開催を記念して特別出品していただくことになりました。近代の日本美術の優品と合わせて、ご鑑賞いただければ幸いです。

◆観覧料

一般	一〇〇〇円	(八〇〇円)
大学生	六〇〇円	(五〇〇円)
高校生以下	三〇〇円	(二〇〇円)

◆ギャラリートーク 毎週日曜日十一時より
※（ ）内は二十名以上の団体料金

(四月二十六日・五月十日は行いません)



重文 不動明王 狩野芳崖
前期4/26～5/9のみ展示



村童観猿翁 横山大観



色絵四弁花文角飾箱 富本憲吉

古美術優品選Ⅱ

4月25日(土)～6月1日(月)

会期中無休

前号でお話ししましたように、「古美術優品選」は特定のテーマ設定では取り上げる機会の少ない作品を選んでいきます。その結果、通常の特集ではみられない取り合わせの面白さも見所の一つといえます。今回は日本の鎌倉時代から江戸時代までの約五〇〇年間の絵画・工芸品に、中国の明時代の工芸が展示されています。その中には、正宗の短刀や、室町時代末に加賀で活躍した刀工の家次や勝光による刀もあります。美術工芸品に見られる加飾としての装飾的な美の追求と、その対極にある、余分なものを削ぎ落として鍛え抜かれた凜とした刀剣の美。そしてその両者をともに美しいと感ずる私たち日本人

の美意識の再認識など、限られた点数ですが、こうした展示ならではの味わいがあると思います。もう一点鑑賞のポイントとして挙げたいのが、様々な吉祥モチーフです。今回の展示作品の中には群れる猿、オウムに子供、象、そして中国唐時代の將軍などが、榮進榮達、子孫繁栄、財運興隆、長命富貴の願いを投影する吉祥モチーフとして登場しています。これらが吉祥の意味を担うようになった背景は、語呂をあわせたものから、作品にあらわれた姿態、そして故事など様々です。展示室には簡単な解説を付けてありますので鑑賞の際に参考にしていただければ幸いです。



郭子儀図 狩野栄信 江戸19世紀

近代日本画とその周辺Ⅱ

4月25日(土)～6月1日(月)

会期中無休

前号に引き続き『明治天皇紀』より、明治天皇による前田邸行幸の様子をのぞいてみましょう。「午後、能楽御覧所に出御。桜間伴馬による『俊寛』など天覧。利為とその家族、旧藩士も観覧を許される。能舞台は巨資を投じて新たに造ったもので、鏡板の松は川端玉章の筆による。能終了後は奥座敷にて、陳列された家什を天覧。」この時、『古今和歌集』など前田家に伝わる宝物が陳列された日本館奥座敷の襖絵が、橋本雅邦によるものだったので

す。雅邦の晩年に描かれたこの襖絵は、春夏秋冬と移り変わる山水の光景を描いたもので、東洋に古くより伝わる伝統的な画題「山水」を、遠近法や陰影法といった西洋絵画の技法を用いて描き出した大作です。特に、春の穏やかな光に包まれる水面と岩場、遠くに見える山々を描き出した春の景は、今の季節に相応しいと言えましょう。四月二十五日からは、夏の景もあわせて展示します。さて、明治天皇を迎えた本郷邸でしたが、大正十五年(一九二六)にその解放が決定し、前田家は退去を余儀なくされます。新たな邸宅は、現在、前田育徳会が位置する駒場の地に設けられ、雅邦の襖絵は新「日本館」にも用いられることとなります。襖絵こそ当時とは異なりますが、駒場公園にある「日本館」は、現在は憩いの場として無料解放されています。

四季山水図(夏の景) 橋本雅邦

第4展示室

石川近代彫刻の巨匠

吉田三郎のあゆみ

ふるさととのつながりを併せて

4月25日(土)～6月1日(月)会期中無休

石川県を代表する彫刻家の一人である吉田三郎(明治二十二年／一八八九～昭和三十七年／一九六二)は、生まれてから今年で百二十年を数えます。本展では本県のみならず、わが国近代彫刻の写実の名手の吉田の代表作を展示するとともに、得意とした肖像彫刻なども展示し、その足跡をたどります。金沢市出身の吉田三郎は、石川県立工業学校を経て東京美術学校へ進学、大正七年に「潭」が、翌年に「老抗夫」が文展で連続特選し若手彫刻家としてその名を確立しました。男性像を中心とする吉田作品は、初期の頃から巧みな写実表現と、鋭く対象に

迫る制作態度から作り出されたるもので、観る者をして確かな存在感と人間性への深い想いをが込められているものであることを印象付けていきましょう。また吉田は優れた肖像彫刻家として、さらには数多くの動物彫刻をこなすなど多方面に及ぶ作域を示しています。吉田の人となりは、県内外の後進の指導にも熱心にあたるなど多くの弟子や仲間からも敬慕された存在でもあったようです。展示品には今日、県内でも身近に見られる肖像作品を交え、郷土とも繋がりが深かった作家であったことも改めて回顧いただくものです。



高峰謙古像

第3展示室

南政善—生誕100年—

4月25日(土)～6月1日(月)会期中無休

館蔵品の油彩、素描による南政善の特集展示を行います。南は明治四十一年石川県羽咋郡志賀町に生まれました。羽咋中学卒業後、東京美術学校油画科に入学し、在学中の昭和九年に第十五回帝展に初入選。十年に卒業。この年の秋、文部省による帝展改組が起き、美術界は大混乱を来たします。改組に反対した洋画家の旧帝展会員達は第二部会を結成して対抗すると、南は「アコーディオン」(当館蔵)を出品し、特選と朝日文化賞を受賞、一躍若手官展系のホープと目されることになるのです。

この南の一歳上に高光一也、三歳上に宮本三郎がいます。いずれも石川洋画を代表する画家達で、年齢も拮抗し、互いに強い意識を持ったと思われるます。三人は十年の帝展改組時に、画壇に強烈な印象を与えて登場し、またそろって人物画の名手で、そのため従軍画家として戦地に駆り出されることにな

るのでした。しかし作風は違います。南は唯一の美術学校出であり、藤島武二に薫陶を受けています。色と形による造形を常に念頭におき、写実を基本として人物を描きます。戦後の抽象画全盛期にあつて、画家は作風を変化させるのですが、南はまったく動じません。ちよつと例を見ないくらいに一本道を進んでいます。今回の特集では、その不動の歩みをご覧いただきたいと思います。

【主な展示作品】

アコーディオン	昭和十年	馬ならぶ	昭和十一年
霜鬢	昭和十六年	黒いタイツ	昭和二十六年
インドネシアの女	昭和二十九年	印度の女	昭和三十一年
舞台裏	昭和三十三年	白眉	昭和四十三年
バリ島の踊り	昭和五十年	他	



馬ならぶ

新収蔵品紹介

平成二十年年度の新収蔵品は、寄贈四十二点、購入六点、計四十八点となりました。ご寄付を賜りました各位に対し、改めて感謝の意を表します。また、今後とも皆様のより一層のご協力をお願いいたします。平成二十年三月三十一日現在の収蔵品総数は三〇二五点です。

区分	作品名	作者名	
陶磁	彩色金彩花器	吉田幸央	購入
陶磁	色絵竹雀扁壺	佐藤亮	購入
陶磁	青釉壺「彩光」	宮西篤士	購入
陶磁	細字香炉	田村金星	藤村光芳氏寄附
陶磁	細字茶碗	田村金星	藤村光芳氏寄附
漆工	「沈金花と蝶文手筥」	前大峰	山田政義氏寄附
漆工	「沈金獅子文膳」	前大峰	山田政義氏寄附
漆工	「残影(棚)」	佐治賢使	上山綾子氏寄附
漆工	「青愁」	柿本章	柿本章氏寄附
漆工	「宵映」	柿本章	柿本章氏寄附
染織	友禅訪問着「夜桜」	白坂幸蔵	購入
染織	友禅訪問着「実(みのり)」	澤田谿女	購入
染織	川蝦の図	木村雨山	藤村光芳氏寄附
染織	麻地友禅朝顔図のれん	木村雨山	藤村光芳氏寄附
染織	臈纈染名古屋帯	木村雨山	藤村光芳氏寄附
染織	友禅花卉文ナイトガウン	成竹登茂男	藤村光芳氏寄附
染織	「ノトロ・サンゴ草」	堀友三郎	堀友三郎氏寄附
染織	「蒼い月」	堀友三郎	堀友三郎氏寄附
染織	「尾の道の朝」	堀友三郎	堀友三郎氏寄附
截金	木彫截金合子「千鳥」	西出大三	購入
日本画	「雪」	安嶋雨晶	東芝ホームアプライアンス株式会社寄附
日本画	「春岬」	安嶋雨晶	東芝ホームアプライアンス株式会社寄附
日本画	「こばいけい草」	下村正一	東芝ホームアプライアンス株式会社寄附
日本画	「盛夏之圖」	木村雨山	藤村光芳氏寄附
日本画	鯰図	木村雨山	藤村光芳氏寄附
日本画	小犬図	木村雨山	藤村光芳氏寄附
日本画	「西瓜に夏草図屏風」	稲垣稔次郎	藤村光芳氏寄附
油彩画	「雪の犀川」	滝川武雄	滝川真人氏寄附
油彩画	「夜明けのライン」	藤井多鶴子	藤井多鶴子氏寄附
油彩画	「南仏ブッセンス水辺」	田辺栄次郎	藤井多鶴子氏寄附
油彩画	「世紀の風 -New wing-」	沢オイ	沢オイ氏寄附
油彩画	「虹の星」	田井淳	田井淳氏寄附
油彩画	「五百羅漢」	相川昭二	相川眞子氏寄附
油彩画	「古い壁面」	畑尚治	畑尚治氏寄附
油彩画	「古墳・幻影(クレーター)」	畑尚治	畑尚治氏寄附
油彩画	「メビウスの環」	畑尚治	畑尚治氏寄附
油彩画	「己曼荼羅一噴」	畑尚治	畑尚治氏寄附
油彩画	「己曼荼羅一樹間」	畑尚治	畑尚治氏寄附
油彩画	「裸婦」	高光一也	北村君枝氏寄附
油彩画	「椅子による」	高光一也	北村君枝氏寄附
油彩画	「電気冶金工場」	谷昭二	谷昭二氏寄附
油彩画	「カタルーニャの松」	谷昭二	谷昭二氏寄附
油彩画	「数々の優勝した馬」	池田三郎	池田久子氏寄附
油彩画	「慕情」	池田三郎	池田久子氏寄附
油彩画	「微風」	池田三郎	池田久子氏寄附
書跡	漢詩 屏風装	市河米庵	片田幸子氏寄附
彫刻	「鴨居玲像」	雨宮敬子	日動美術財団寄附
彫刻	「天窓の上の獅子座」	末政哲夫	末政哲夫氏寄附



彩色金彩花器 吉田幸央



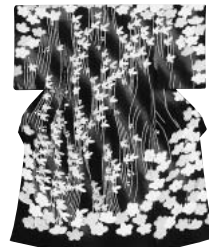
青釉壺「彩光」 宮西篤士



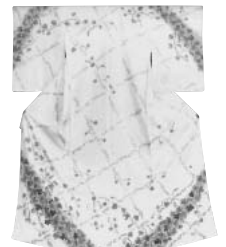
木彫截金合子「千鳥」 西出大三



「残影(棚)」 佐治賢使



友禅訪問着「夜桜」
白坂幸蔵



友禅訪問着「実(みのり)」
澤田谿女



春岬 安嶋雨晶



西瓜に夏草図屏風
稲垣稔次郎



裸婦 高光一也



鴨居玲像 雨宮敬子

展覧会回顧

百万石の大名展

平成21年2月15日(日)～3月22日(日)

この展覧会は平成二十年度リニューアルオープン記念シリーズの最後を飾る展覧会として、前田家の初代利家から五代綱紀にいたる歴代藩主の歴史とともに、主に三代利常や五代綱紀によって収集育成された加賀藩の文化を総合的に紹介しました。ご存じのように、当館の常設展示部門には「前田育徳会尊經閣文庫分館」という展示室があり、前田育徳会のコレクションを常時展示しておりますが、今回のように「前田家の歴史と文化」を前田育徳会の所蔵品で紹介する大規模な展覧会は、旧館時代の昭和三十八年以来四十六年ぶりでしたが、初めてご覧になる方も多かったようです。今回は多方面にわたる作品の鑑賞はできませんが、一分野についてより深く知りたいと思う鑑賞者には、物足りなく思われたことでしょうか。常設部門では、今回展示しなかった作品も含め、これからも様々なアプローチによるテーマを設定し、毎月展示替えをしながら加賀藩前田家の文化を多角的に、よりわかりやすく紹介していきますので、お楽しみいただけることと思います。

今秋の特別展として「久隅守景 — 加賀で開花した江戸の画



家」を開催します。守景(生没年不詳)は狩野探幽門下の四天王の一人として知られていますが、高岡の瑞龍寺(二代利長の菩提寺)に、前田家の依頼により描かれた「四季山水図」の襖絵があります。代表作の国宝「納涼図」や一連の「四季耕作図」は加賀の文化風土の中で描かれたと思われまます。また、高岡では開町四百年を迎え、利常や利常の足跡をたどる展覧会をはじめ様々なイベントが開催されるようです。このように前田家が育んだ加賀文化は、今日でも伝統産業や観光資源として息づいており、確かな伝統文化を後世に伝えていくことが、本来の人間性を回復し明日への活力となることを願っております。最後になりましたが、展覧会開催にあたりご協力いただきました(財)前田育徳会に心より感謝申し上げます。

美術講座のご案内

平成二十一年度の講座は、三本立てで行います。一つは土曜講座、五月十六日に開講します。夏とお正月の休みを除く、毎週土曜日午後一時三〇分から約三〇回を予定しています。本年度は前後期制をとり、前期では「日本美術史」と題して、九月十九日までの十五回シリーズを計画しています。第一講は、嶋崎館長による「日本文化のあけぼのと特質」。絵画・彫刻・工芸の三分野の歴史を時代別にたどる講座で、講師は当館学芸員が務めます。後期は十月より学芸員が普段行っている研究テーマについての講座になります。

またこの土曜講座とは別に、「加賀の文化講座」も予定しています。当館では二階に「前田育徳会展示室 尊經閣文庫分館」を開設しており、前田育徳会や尊經閣文庫を広く皆さんに知っていただくために、所蔵する文化財や歴代藩主の話題のほか、加賀藩の歴史とその文化をさぐる講座です。具体的な内容や日程はこの後決定されますが、県内外から講師を招いて行います。どちらの講座も受講は無料、事前申し込みの必要ありません。子ども対象のキッズ☆プログラムは、鑑賞講座、体験講座とリマゼン十回ほど行います。本年は土曜日から日曜日に曜日を変えて行います。制作や体験の講座では、参加費が必要なものや参加人数が限られているものがあります。

たくさんの方の参加をお待ちしています。

第7回美術館バスツアー募集

飛騨の匠を巡る旅

期 日／平成二十一年六月六日(土)
 参加費／七五〇〇円
 (会員外は七七〇〇円)
 募集定員／四十五名
 (対象は原則として成人)

【見学予定地】

高山市

◆吉島家住宅(重文)

天明年間より続く豪商吉島家。火災により焼失した住居を、明治期に名工と謳われた西田伊三郎が再建。建築家をされているというご当主による案内があります。

◆飛騨国分寺(重文)

千二百年前、聖武天皇の勅願によって建立された真言宗寺院。国重文指定の本尊薬師如来(天平)、聖観音(平安)、本堂(室町)などをご住職の解説で見学します。

◆飛騨高山美術館

エミール・ガレやルネ・ラリックに代表される十九世紀末ヨーロッパガラスの逸品を担当学芸員の解説で鑑賞します。

古川市

◆飛騨の匠文化館

飛騨の木匠たちの技術を伝承するため、各種の展示をしています。古川散策、円光寺見学の予習にもなります。

◆円光寺

古川の町並みにしつとりとなじむ本堂は、室町の建築様式を残し、千六百年代に再建されたもの。飛騨の匠の技を堪能できます。前ご住職に寺の縁起などを伺います。

【申込み方法】

◇往復はがきに下記の事項を記入し、ご応募下さい。応募者多数の場合は抽選になります。

①往信はがきの裏面に「美術館バスツアー希望」と明記し、住所、氏名、年齢、電話番号、会員番号(友の会会員のみ)をお書き下さい。

②返信はがきの表面には返信先をはっきりとお書き下さい。

③返信はがきの裏面には何も書かないで下さい。

応募先

〒九二〇一〇九六三

金沢市出羽町二一

石川県立美術館バスツアー係

応募締切り：五月十五日(金)必着

※応募者一名につき、往復はがき一通で応募下さい。一人で何通も出されたものや、連名のもの、記載事項が不備なものなどは無効となりますのでお気をつけ下さい。

5月の行事予定

◆「近代日本美術の精華」関連行事

講演会「藝大コレクションの歴史」
 講師／薩摩雅登氏(東京藝術大学教授)
 日時／十日(日)午後一時三十分
 会場／本館ホール 聴講無料

◆ビデオ上映会

十三時三〇分より美術館ホールにて 入場無料

17日(日)	日本美術史7-1 明治・大正・昭和西洋画との出会いと模索(24分) 日本美術史7-2 明治・大正・昭和 日本画の伝統と変革(25分)
24日(日)	人間国宝1 漆芸、蒔絵、松田権六(25分)
31日(日)	心ありき 陶芸家、にんげん板谷波山(46分)

◆土曜講座

十三時三〇分より美術館講義室にて 聴講無料

16日(土)	日本美術史1 日本文化のあけぼのと特質 嶋崎丞館長
23日(土)	日本美術史2 琳派に至るやまと絵史 村瀬博春学芸専門員
30日(土)	日本美術史3 日本で見られる江戸の絵画五十選 村上尚子学芸主任

◆キッズ☆プログラム

企画展「近代日本美術の精華」親子鑑賞会
 「明治時代をのぞいてみれば」
 17日(日) 十三時三〇分より
 講義室／企画展示室
 親子とも観覧・参加無料



南政善は昭和十年に東京美術学校油画科を卒業しますが、その後から帝展、新文展に入選・特選を得るなど、早くから洋画壇に頭角を著した画家です。生涯人物を主題とし、男女を問わずモデルを探し求めました。本作は作者がインド女性をテーマとした最初の作品です。ミセス・タンダンという貴族の女性をモデルに描きました。じつと見据える大きな双眸、意志の強さを感じさせる高い鼻と口元、そして左の指先を天に向けた独特なポーズ。神秘性を感じさせる気高い肖像画です。

作者はモデルにもポーズにも強いこだわりを持ち続けました。踊り子や男のダンサーをよく描いたのですが、それは、通常にはないポーズをとつても、不自然なく受け止められるからだと思われまます。

この作品の場合、左手はいかにもインドと思わせ、なんら違和感を感じません。黄色地に黒の帯を付けた民族衣装のサリーは、巧みに三角形の安定した構図を作ると共に、肩から胸、腰、膝、足もとにかけてのよどみない流れを生んでいます。そして幅太の黒地に描かれた草花文を、緋色のバックにうっすらと繰り返して、画面の一体感を強めているのです。

画面の中に様々な工夫を凝らし、それがさりげなく見える本作は、南政善を代表する一作といえるでしょう。

次回の展覧会

前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室 (古美術)	第5展示室 (近現代工芸)	ご利用案内
<p>「百万石大名の装い」 — 甲冑・陣羽織 — 6月5日(金)～7月20日(月・祝)</p>	<p>「色絵の系譜」 古九谷・再興九谷を中心に 6月5日(金)～7月20日(月・祝)</p>	<p>「ガラスの煌めき」 6月5日(金)～7月20日(月・祝)</p>	<p>コレクション展観覧料 一般 350円(280円) 大学生 280円(220円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金</p> <p>開館時間 4/26(日)～5/31(日) 午前9:30～午後6:00 毎週土曜日は午後7時まで</p> <p>カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00</p>
<p>—— 5月は休まず開館します。 ——</p>			
<p>石川県立美術館だより 第307号 〒920-0963 金沢市出羽町2番1号 2009年5月1日発行(毎月発行) Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550 URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/</p>			